

四月十五日

五時起床。室内原稿書く。六時半家を出れば良いか。新宿で立喰いソバ食って七時〇七分のナリタエクスプレス。

十二時過ぎ、只今JAL791便で上海へ向けて飛んでいる。杉浦康平、佐藤健、滝雄一カメラマン、私の四名。成田には馬場昭道が見送りに来ていた。佐藤健の変わり方にはボー然とするしかない。元気な時を知っているから殊更だ。旅から無事に帰れたら、その先の健さんの事は昭道さんに任せよう。自分にはこれくらいが精一杯だ。弱っていく友人を見続ける度胸は俺には無い。こういう佐藤健はスーパーマイノリティなんだろうな。機内食をポロポロ喰べ損じている健を横目で見なくてはならぬのは本当に辛い。早く帰して畳の上で休ませなければいけないのに西域行きとは。これは狂気の沙汰の最中に居る。杉浦康平も痛風で足が動かぬのに、無理して彼も同行している。健の狂気がそうさせている。重病人介護ツアーだぜこれは。それを西域まで行ってやろうと言うのが健の意気地だ。杉浦さんがさつき成田で言ってたよ。健さんは今、気力の人だつて。狂気は一定を過ぎると喜劇風に見えてしまうものなのか。

上海空港昼過着。上山大峻龍谷大学長と合流。ガイドの盧さんと合わせ総勢六名となる、上山学長の提案で上海博物館見学。古代の各室は中国の底力を見る思いがする。遠く離れた旧空港で地方便を使うシステムになっている。上海という都市は遊戯的趣き

が露出したプロレスシティだ。この事は室内の連載に書こうと思う。西安には二〇時過に着いた。西安のホテル長安城堡大酒店着は二十二時。名前は変わっているがこのホテルは数年前磯崎夫妻と中国に来た時宿泊したホテルだ。室内原稿上海西安便でほとんど書き上げていたので、十二時前終えて、長井にFAX送る。ヤレヤレ。

明朝は四時四十五分モーニングコール。ハードな旅になった。まあしかし大谷探検隊の足跡を辿るのが目的の一つなのだから、これが自然か。佐藤健の体調は極めて悪い。ガイドの盧さんにまで異常さに気付かれてしまう。今晚ぐっすり眠れるかどうかがこの旅の成就いかんの境目であろう。

今日は短い上海論が書けたのが収穫だ。

四月十六日

早朝四時四〇分起床。昨夜はとぎれとぎれに眠った。七時三〇分過ぎ西安空港より敦煌へ飛ぶ。佐藤健チケット紛失してチヨツとした騒ぎ。上山さんが砂漠の上を飛ぶのは気持ちが良いと言っていたのを思い出し全員窓側の席に移るも雲厚く下界は見えず。ウトウトとして九時過眼を覚ますと飛行機は砂漠の上を飛んでいた。実に美しく砂漠が見える。砂漠は単調ではない。無限に多様な地形を出現させる。蛇のように見える風紋や、よじれた毛髪のような地形。時々、白と緑のオアシス。白は岩塩だろう。昔人々は空を飛べなかった。しかし様々に想像力を働かせて空から今、私が見ているようなモノに似せて造形物を作り出していた。今私たちは空を飛び時に成層圏を飛ぶ。そして昔の人々が視なかった光景を間近にする事ができる。それを良く生かしているかどうかは別だけれど。大谷探検隊は大変な苦労をして陸路敦煌に辿り着

いた。私たちは現代の技術を使って二日目に敦煌に到着できる。しかし、そこで何を見るかは別なのだ。釈迦は修行の末ある種の状態に辿り着いた。その状態は成層圏から眺めるヒマラヤの落日の荘厳のようなモノではないか、とスペインの貴族ディエス・デル・コラルは著「アジアの旅」で述べる。実二、私のアジアの旅の折り返し点はこの視点の存在である。十一時前敦煌空港着。ゴビ砂漠の外縁に位置する砂漠の中の空港。土と砂の他は何も無い。体の中をフツと風が吹き抜けて何故かイイゾとただただ嬉しい。若い時からの感じなんだなコレガ。空港前の広場もただ風が吹いていて誰もいない。敦煌賓館にチェックイン。空は灰茶色一色。ポプラの小木が風にゆれている。

午後敦煌莫高窟見学。どう表現して良いのか解らないモノだった。要するにこれは砂漠のガケを荒っぽくくり抜いて、分厚く左官工事で補修し、彩色したものである。今日のところは中央の大仏しか内部は見えていないが、いささか気が抜けた。ただし木造部分の謂わゆる差し掛けの構造が宋時代のものらしく、明日詳細を見るが、大仏様であるかも知れない。

四月十七日

昨夜は二二時前に寝た。今朝六時三〇分まで眠る。この旅で初めて眠れた気がする。室内日経共にゲラが送られてくる。便利になればなる程に大谷探検隊の苦勞と彼等が見たものが気になる。七時半食事。八時半HOTEL発。敦煌へ。第十六、七窟その他を見学。阿弥陀図像のある窟を三ツ程巡る。窟莫高窟に對面する三危山に登り全景を眺める。ミャンマーのパガン以来の荒涼たる風景で気持ちと和む。午後は再び敦煌研究院劉永増氏の案内で幾つもの窟を巡る。どれがどれやら記憶はすでに錯乱している。

敦煌に来て莫高窟を実見してわかったこと。

一・これはアースワーク。つまり地球の特別な一点になされた絵画的作業である。

二・建築として体験しようとするとかなりルーズなもので、洞穴に建築的概念が彫られたものではない。洞穴はただただ壁画用の天井、壁として彫られたものだ。つまり最初から絵画の収蔵庫としてだけ考えられていた。その意味では莫高窟の沢山の穴は、コンピュータであり、その集積である。空間は消えている。洞窟は無数の仏教的意味（アイコン）のネットワークである。

三・絵画の下地は分厚い左官工事である。莫高窟は卑弱で、それが命であり、それ故にオアシスの河の流れが命綱でもあつたらう。四・建築として唯一面白いのは、全ての木造部分が差し掛けでつくられていて、その一部は宗の時代のものである事。約一〇〇〇年前の宗の建築様式が見えること。日本建築で例えば三仏寺の投入堂が群立しているのである。それ故に一に戻り、莫高窟はアースワーク、つまり大地に仮留めされた建築群でもある。工事中、制作中の莫高窟には木造の足場が林立し、差し掛けの堂とあいまって巨大で独特な風景を出現させていた。全山足場と差し掛け屋根ばかりという、特異な風景だったに違いない。彫刻としての仏像その他はルーズなもので、絵師の下地造りの意味しか与えられていなかったのではない。

夕方、敦煌の外れの田舎屋風レストラン、日本で言えば民芸レストランで食事。一九〇七年の敦煌の写真が掛けられていた。スライムが撮ったものと劉さんが言う。へー。ホテルに戻り、町へ散歩に出る。杉浦さん等と中国茶飲んで健は足のマッサージへ、我々はみやげ物屋をひやかして二時過ホテルに戻る。丸二

日振りに熱い風呂に入り、洗髪する。二三時過ぎ寝る。敦煌学というものがあるらしく、平山画伯が権勢を振るっているらしい。莫高窟の前には竹下登元首相がODAで寄付した日建設計による博物館もあった。今日はスケッチを一枚できたのが良かった。莫高窟の懸崖造りを描いたのだが、手を動かしていると色んな事に気付くものだ。かと言ってカメラは捨てられぬ。

四月十八日

朝六時起床。折角持ってきた東山健吾著敦煌三大石窟読もうとする。上山大峻、劉永増敦煌研究所員の会話中に東山氏の名が良く出ていたのを思い出す。昨夜予定されていた上山杉浦石山の敦煌対談は落日の撮影その他で中止となり、後日京都でという事になった。内心ホッとした。杉浦さんのアジア図像学上山さんの敦煌学に対して何を持って立ち向かえば良いのか見当もつかなかったからだ。かと言って少し計り延期されただけの事で、まことに気が重い。鈴木博之とジョサイア・コンドルと近代日本について対談せよと言われたら誰だって逃げるだろう。敦煌くんだりまでノコノコ出かけて来てしまった自分を悔やむしかない。しかし莫高窟大仏前で三人一緒の対談用の写真までとられてしまったから、日本に帰っても絶対逃げられないぜこれは。その仕掛人の佐藤健はと言えばヨロヨロしながらも今のところ全行程に附合っている。莫高窟の急な階段もこなしたし、三危山の中腹へも登った。並の気力じゃない。鬼気迫ると言うのが本当なのだろうが、佐藤健の場合は、それが笑いになってるのが凄いと思う。昨夜も中国茶を飲みに行つて、店の者に何種類かの茶を飲まされた。雪茶、ウーロン茶、その他の茶だ。どのお茶が一番好きですかの問いに「僕の小学校の時に好きだった女の子がお雪ちゃ(茶)ん」だっ

て。駄洒落を文章にするとこんなに下らないものか。そんな洒落敦煌まで来て通訳付きで中国人の若い娘に言ってる場合じゃないだろうと思うのだが、やっぱり笑えるよね。これが佐藤健が一生賭けて辿り着いた境地なんだろうと考えてしまった。誠に俺は甘い。

朝食後鳴沙山へ。登らなかつたけれど絵葉書みたいに美しい大砂丘だった。月牙泉を巡りのんびりする。昼食後ついでのもつもりで敦煌魏晋墓に寄る。何年か前に発掘された古墳で約千七〇〇年昔のものと言つから、日本では当然古代。この時代の日本には口クな遺跡はない。最近一般公開されたそうで扉を開けてもらい中に降りてみて驚いた。三層分くらいの高さに掘られていてそこに実に堂々たる建築が埋められているではないか。黒レンガ赤レンガの構成も素晴らしく又構造的にも実に堅固に作られている。玄室は寄棟がゆるやかにムクリを見せ、天井の中心には絵が描かれている。玄室への入口はしっかりしたアーチだ。

二つの墳墓共に見事としか言い様のない構成デザインで圧倒された。AD三〇〇年頃のものらしい。何故こんな素晴らしい建築技術を持っていた民族が敦厚莫高窟にこれを引継げなかつたのだろうか。良く考えてみれば土中と言うよりも砂礫中にレンガ積みで建築を作る方が、同様に石窟を掘り、左官で塗り固めるよりも困難で良質な技術の使い方だ。莫高窟は明らかにこの墳墓よりも建築技術の水準は低いのである。何故この墳墓のように地中に建築を建てなかつたのか。

恐らく金銭的な問題があつたのではないか。莫高窟は私的な寄進の連続で作られた群れだ。国家的事業ではない。投入される金には一定の限度があつた。その配分は大まかに絵師、左官、荒彫り職人、足場掛け、差し掛け屋根職人(大工)の順序だったので

はあるまいか。絵師に投入される金が膨大で、それでレンガ積み
の建築を地中に作れなかった。この墳墓を見る限り敦煌には建築
を作る技術は充二分にあった。

それはとも角、凄いモノを見せて頂いた。敦煌を考えるのには
墓が何かしら大事だとその予感的中した。

五時二〇分の中国民航で西安へ。敦煌は最後の墳墓が圧巻であ
った。地中の建築について色んなアイデアを手中にできた。大地
に関して考える事が多くなっていて、又仕事も墓や寺を手掛けて
いるので、自然にそうならざるを得ない。窓の外は黄砂なのだろ
うか、薄曇りで下界は何にも見えない。

墓の事克明に調べ抜いたら面白いだろうに。無茶苦茶面白いぜ
よ全く。残念ながら俺にはもうそんな遠廻りしている時間が無い。
ありとあらゆる建築の父は墓で、母は住居だろう。誰かそんな巨
大な地中住居「墓を発注してくれないか。今なら出来るんだけれ
どなあ。飛行機は西安に向けて降下を始めた。西安は秦始皇帝の
墓の近くに作られた都市である。

十九時二五分西安空港着。三日前に泊まった長安城堡大酒店泊
九時三〇分からの夕食は西安名物のギョーザ。多分何年も前に来
たことがあるギョーザ屋の筈なんだが、余りにも都市の姿が変わ
ってしまったので記憶が失くなってしまった。みやげ物売りの人
間が多くなって、しかもしつこい。観光バスが大量に押し寄せて
再び西安は国際都市になり、同時に西安は崩壊しているような気
がする。六〇年代の東京の変転がもつと急速に起きているのだ。
大気の汚染もはなはだし。

四月十九日

上山大峻、杉浦康平両氏を送るため早朝五時四十分起床。彼等

は今日北京へ発つ。たった四日御一緒しただけだったが親しくな
れて良かった。敦煌までやってきた功德だろう。時間が少しある
ので世田谷村日記をチェックする。この日記も情けないことに世
田谷村を出て旅にいらっしゃる方が量が書けている。普段の生活に細部を
見ようと思つて始めた事だが、やっぱり旅には敵わないか。屋上
菜園のディテールを書くのは敦煌書くのよりも面白い筈なんだけ
れど、まだ力が無いんだな。七時過上山杉浦両氏を見送る。残る
は病人と介護人二人。阿弥陀の道を巡るとんづまりの旅である。
体調は良い様な気がするのだけれど本当のところはどうなのかは
知らぬ。今日日経の連載コラム書かねばならないか。一応毎日新
聞隊の一員で来ているので、敦煌のことは書かぬのが仁義かと思
うが、かと言つて他に何を書けば良いのか。あんまり考えずに先
ず朝食だ。7階から見ると西安の風景は大気の状態も都市の状態も
極めて悪い。八時朝食。佐藤、滝と三名で。今日も一日淡々とし
て暮そう。午前中香積寺とやらに行くらしい。香積寺は浄土宗法
然の源になる寺であるとの事。偉い人が二人去つた。少し自分勝
手にスケッチ三昧してみたい。滝力メラマンの人生つても興味
津々になってきたな。三十半端くらいかと思つていたら、すでに
五三才なんだつて。良く佐藤健と附合っているよね。

九時HOTEL発香積寺へ。西安県つまり郊外のひなびた寺で、
ミニ大雁塔がシンボルだ。周辺は中国農村の面影を残しており、
のんびりとして気持ちよい。佐藤健住職の繹存昌氏インタビュー。
この寺は法然の浄土宗ゆかりの寺で善導師が興した。善導香積寺
と呼ばれる由縁だ。浄土宗はここから起きたと言つて良い。梧桐^{ウイグ}
子の樹の花が満開であつた。繹住職も若い人であつたが柔和で大
きな人柄を感じさせた。スケッチをして気分も和んだ。次第に建
築のスケッチよりも人間の方が面白くなって困りものだ。帰路、

道沿いのレンガ工場の写真を数点撮影。中国の大地の力を感じた。土は面白そうだ。大雁塔に寄り、青龍寺へ。空海が惠果に出会った寺だが、今は寺は阿弥陀が幅を利かせている。密教の寺の筈なのにおかしいな。昼食後ショッピング少々。日本人向けのイヤな店に連れていかれ、案の定佐藤健爆発。中国人店員の態度が余りにも悪過ぎた。中国の旅行社より店に抗議させて、結局夕方態度の悪い店員とマネージャーがHOTELに謝罪に来た。これ位やった方がイイのだ。ヒスイの指輪なんか謝罪の印ですとか言っていて来て、佐藤健突き返し、受取らず。当然である。いたる所で現代中国人の金権体質を見せつけられて本当に嫌になってしまった。中国人は全く金だけが好きになってしまったようだ。

夕方西安中心街の回教人、つまりイスラム教徒街のバザールをひやかす。ここは商売が健全に働いている。中国の少数民族は信頼するに値するな。晩飯は火鍋料理でこれはおいしかった。食事の後回教徒のバザールを再び訪ねる。近代化された中国の商行為の質は倫理的水準が極めて低い。イスラム教徒及び少数民族の力を信じよう。漢民族主体のシステムははなはだしく危険なのだ。佐藤健ようやく気嫌が直ってHOTELに帰る。十時過、洗濯物をたたんでパッケージする。疲れて風呂も使わずに休むつもり。もう西安はヨイ。居たくない。俺はやっぱり田舎者なんだな。土の匂いと草が無いと息苦しいのだ。年々、それが解ってくる。

四月二〇日

六時起床。三〇分荷物造り。食事へ。定例の三人で朝食。佐藤健の池尻での生活の一日の話、及び永六輔淀川長治チャップリンの逸話なども聞きながら、今日も旅の一日が始まった。昨夜東京よりFAX入って佐藤滋日本建築学会副会長当選の報その他。良

かった。私もかろうじて義務を果たした。早稲田への義務はもうこれ位で良からう。アトは鈴木だ。薄日が差してきて天気は良くなる模様。しかしこのHOTELの大きなアトリウム空間は良くない。こんなに広大な土地に何故高いビル建てなければならんのか。西安中四、五階建てに押えれば良かったのに。人間の都市ができたのに。少なく共、城壁内はそうすべきであった。チャンスはあった筈だ。中国は愚かに急ぎ過ぎている。

八時半西安空港着。九時半発大東行の飛行機は待てど暮せど来ない。十一時半発くらいになるだろうとの事だが、アテになるまい。今迄が順調に行き過ぎてきたのだ。やっと中国らしくなってきたな。ジタバタしないで待つしかない。十一時ようやく故障を直して出発できる模様。滑走路上で随分待たされた。無事飛ぶことを祈る。今、離陸した。大原までは五十五分のフライト。中国西北部を飛んでいるのだが意外に大地にディテールがあるんで驚いた。中国つてのはこちらの勝手な思い込みで大平野の連続というイメージがあつたから。

北京の人民大会堂を訪ねた時巨大な部屋に毛沢東が八八だったかの少数民族の人々とともに旗を振って前進している絵があつた。中国の指導者は皆国内の少数民族、つまりマイノリティーの扱い次第では中国という国家は瓦解する可能性があるのを知り抜いていたのだ。十一時五五分下降を始めた。なんとか無事に飛べたようだ。しかし古い飛行機のエンジン部は手で直せるのかね。私の眼に狂いがなければ先程滑走路上で修理していた後部エンジン排気部はエクゾーストガスの流れをコントロールする部品が完全に取り外されていたから、機体の主要部分に故障があつたわけでは普通考えれば人間が四、五人よつてたかつて手で直せるものではない筈だ。古い小型ジェット機は手で直せるように作られている

のかな。ともあれ小型ジェット機（二〇数名乗っている）は今のところ実に安定して飛んでいる。意外だ。十二時只今、アト十分で大原飛行場に着陸するとのアナウンスがあった。農村集落はえらく近代的なマスタープランで人為的なコミュニティ単位になっている。人民公社の名残りか。只今、二一時十五分大同市雲岡大賓館のHOTELに戻ったところ。夕食は火鍋料理。レストランは若い工員で一杯だった。

今日の午後はこの旅で一番ショックだった。山西省第一の都市大東市から第二の都市大同まで四〇〇KM程を五時間チョツと走り抜けた。車から眺めただけの風景に過ぎなかったが農村は廃虚同然に荒涼としていた。黄砂舞う中でモヤの中に農民が動物同様に立ちすくんでいる風があった。西安、上海の狂騒は何なのか。こんな農村の廃虚振り立替へに中国は幾つかの都市の狂騒を手中にしているのか。走る車の中で言葉を失った。大地の乾き切った泥を素手で耕そうとする百姓。上海の超高層ビルの馬鹿騒ぎ。

その距離は余りにも遠い。現代中国の絶対矛盾。中国石炭発掘の70%を占める地域らしく沿道は石炭の掘り出しが盛んで、その黒ずんだ風景が荒涼たる風を倍増している。風もビョービョーたる吹き方をして、風立ちぬ、なんてセンチメンタルイズムの差し込む余地もない。宮沢賢治が中国の農村風景を見ていたら、彼はアララの詩を書いただろうか。他人の国の事ながら私は久し振りに冷く怒った。こんな大矛盾を眼の当たりにして、建築だけを考えられる筈がない。と思った途端にHOTELの案内書にはさんであつた絵葉書一枚に仰天。恒山懸空寺名の寺院は三仏寺の投入堂そのもの、否三仏寺を二〇倍くらいスケールアップしたものではないか。初めて知った。もし時間が許せば明日見たいものだ。世界は広い。大同まで来て良かった。大問題も面白いが、建築とい

う小問題もそれはそれで仲々に面白いのである。困ったもんだね。○時四〇分、日経連載コラム、書き終える。中国・都市・農村とした。さあ寝よう。明朝は七時三〇分朝食だ。全く軍隊みたいな日々だ。しかし色んな事を考えることができている。ありがたい。

四月二一日 日曜日

六時五〇分起床。荷造りをする。今朝は雲岡石窟見学。それに昨日見つけた懸崖造の寺にできれば行きたい。旅に出て一週間目。酒も吞まず淡々としてやっている。自業自得明王とあの世の名まで上山学長につけられてしまった健のこの後はどうなるのだろうか。帰ったら昭道と相談してみよう。方法的な交友関係にしないと俺も気持ち平穩でいられない。感傷は禁物である。大同市は石炭のまちだ。黄砂が吹いて空は真黄色。陽もつすい。この町の将来もしんどいのだろう。一次産業は辛いのだ。

朝食時に相談してみたらあの懸崖造りの寺はとも今日一日では無理らしい。五台山にあるとの事。今回はあきらめよう。又アレを訪ねる機会があれば良いのだが。五月末のカンボジア行きの帰りに寄ってみるか。朝食後雲岡石窟へ。市内から三〇分程のところ。

車を降りて、遠くに敦煌莫高窟と似たガケの連鎖とカケ屋が見える。参道はおみやげ物屋で一杯だ。佐藤健今日も完全に行程をこなそうとしている。意地だろう。全四十五窟を巡るのはそんなに困難ではなさそうだ。先ず東部の一〜四窟へ。初めに入った四窟が良かった。一、二窟を早足で見ると。主要な五、六窟は人が多くてゆっくり見る事ができない。しかし見事なものだった。アジヤンタの仏教窟と時代は同じ頃か。帰国したら調べ直してみたい。余りにも有名な二〇窟には少々失望した。しかしこの二〇窟は私

の大学院時代の恩師である田辺泰先生が伊藤忠太と共にシルクロードの旅をした時に立ち寄った写真を何かで見せたか、見せられたか、した記憶が鮮明にあり、どうしても訪ねたかったモノであった。雲岡石窟群については又後に記したい。

昼食後、太原に向けて走る。昨日の強烈な農村の印象もあり、滝毎日新聞カメラマンどうしても農民のインタビュをとりたいと言う。私も中国山西省の百姓の話は聞いてみたかった。二度程ストップして百姓達の撮影とインタビュ。凄く面白かった。面白というよりもシヨックだった。これもいざれ記してみたい。今すぐには考えがまとまりようがない。石炭坑の村の写真も二ヶ所で取材して、太原に着いたのが十九時過。佐藤健のつき合いで地図を買ったりして山西大酒店にチェックイン。

佐藤健体力の限界に達していたようで、イラついている。今日は最高気温二十九度だったらしく疲れたのだろう。夕食はおかゆ屋へ行った。おかゆ屋で健が爆発。そりゃそうだろう肝臓癌で死と対面している健さんと、どうしたってそれを身体的に実感し得ぬ我々、つまり滝カメラマンと私とでは会話の切迫感が違ってしまつのは仕方ない事なのだ。この旅で健さんはかろうじての超低空飛行を続けている。その低空飛行振りを解りながらも、つまり佐藤健は今現在突極の試練と対面しているのだ。というのは頭で理解し、対応し得ていても身体、感覚は対応できない。共に悲しみ共に苦しむ事ができぬ。釈迦の慈悲など到底こちらには及ばぬ現実の只中なのだ。俺はまだ良いのだ。每晚同室でいる滝カメラマンの大変さは異常であろう。俺は一人になれるから。率直に言えば佐藤健の頭の中は自らの身体の事で一杯なのであろう。死との対面まで当然考えているに違いない。敦煌雲岡どころではないのだ。しかしその絶対的現実にごう対応すれば良いのか皆目わか

らぬ。とても私の手に負える問題ではないのだ。アト一日である。何とかやってみよう。センチメンタリズムとエエカツコシーだけは避けなければ。しかも正直過ぎてもしなければならない。最低限誠実な演技力が必要なのだ。佐藤健の辛さと比べればこんな事はどおって事ない。しかし辛いぜコレワ。面と向かって「自殺するよ俺は」なんて言われてみる。どんな言葉を返せば良いのだ。

俺もいづれこんな事になるのだろうが、出来得ればそんな時は一人に引き込みりたい。あがいている健を見るとそう思う。しかし出来るかな。出来ネエよ。明日一日佐藤健の気持ちに平穩であるように祈る。

四月二二日

旅のおわりの日である。昨夜は髪を洗い、たつぷりと風呂に入ったので熟睡した。七時十五分起床。

私には農業農村の問題に取り組む時間が残っていない。陸海にやらせるのか、高木か。アジアの農村の諸問題に関して誰か弟子を取り組ませたい。M1にチームを作らせるのが最善だろうが人材がない。誰も農業って顔してない。これからは農業なのに。

十九時HOTELに戻る。佐藤健発熱。明日はどうしても日本に連れて帰る。弱くなった姿を見せたくない意地は解るが、弱くなったママで良いのだから無理しないで欲しい。こんな健を見るのは初めてで俺も動テンしかねない。冷静な判断が必要だ。何しろ明日はどうしたって日本に連れて戻る。こちらの病院になんか残せない。時間がバラバラに混乱しているが、朝九時HOTEL出発。玄中寺へ。車で一時間二〇分程の行程。国营緑化公園中の静かなたたずまい。建築はよろしく無いが、ボタンの花が咲いていた。僧侶にインタビュ中に健が寒い、悪寒がすると言い出し

て、彼一人ガイドがついてHOTELに帰る。心配な予感が現実となる。十七時ドライバーが玄中寺に戻り私と滝力メラマンをピックアップ、HOTELに戻る。健さんはとりあえず無事であった。明日はどうなる事が予断を許さない。滝氏ガイドの蘆明東さんと旅の終わりの食事。健さんはHOTELに残った。これが健さんとの最後の旅になるのかも知れない。今更ながら、老いる事の困難さを痛感する旅であった。明日はモーニングコール五時三〇分朝食六時。八時の便で北京へ。そして帰国の予定。何しろ佐藤健を無事に日本まで連れて帰る事が一番だ。突然禁煙を決意する。が、今迄に何回決意した事か。我身の愚かさを知るばかりだ。世田谷村の屋上菜園はどうなっているのだろうか。帰りの飛行機ではこれからの計画を少し整理する必要があるな。二三時十五分入浴混乱しかねない頭をスッキリさせよう。

四月二三日

五時二〇分起床。六時食事。佐藤健平熱に戻る。体の芯は強いのだ。日経新聞にFAX入れ直す。坂田明脳出血で入院スの報がベシーの菅原から入ったらしい。バタバタいくな同世代が。大同市からの最後の一枚が着いていなかった。八時大原空港より北京へ飛ぶ。九時北京着。十四時五〇分まで時間をつぶさねばならない。念のため空港より再FAX。コーヒーショップでボーッと過す。つぶす時間がある内が花なのだろうな。人間には休息が何故必要なのだろうか。眠い。これからのプログラムを確認しようと思っても、眠くて出来ない。健さんは一人で買い物に歩ける位にはなった。十五時離陸。中国では良く学べた。何よりも佐藤健の旅に同行出来たのが良かった。生老病死は逃がられぬ宿命だが、毎時毎日毎週毎月毎年を停止する事なく、ゆっくりと歩き続

けたいものだ。

世田谷村日記をもっと充実させる事からプログラムを組み直す。佐藤健との敦煌その他、西域の旅で学んだのは、一日一日をことさらに観念的にもならず、センチメンタルな心情からも逃げまくり、しかも淡々としてやってゆくことの大事さだ。その事を突きつめれば、日々の暮らしを深化させる努力を続けるという事で日記を付けるように考えを拡張し、また同時に集中させる事でもあろうか。つまり日記を付けるように建築を作り、いろいろな身の廻りのモノを作り、スケッチをして、絵を書くということだろう。日々の生活が深まってゆく事が意識できれば、それがいつ中断されても、それ程に無念な事ではあるまい。機内の日本の新聞を読んでいたら、つい先だつて佐賀で書いた「未完の芸術」ガウディ論が掲載されている雑誌ナレッジ「HOME」の広告が出ていた。すでに日本上空である。